

平城京左京二条二坊・三条二坊

発掘調査報告

——長屋王邸・藤原麻呂邸の調査——

本文編

第一章 序　　言

この報告は、平城京左京二条二坊五坪と三条二坊一・二・七・八坪において、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1986年度から1989年度に実施した第178次、第184次、第186次、第190次、第193次、第195次、第197次、第198次、第204次調査の結果をまとめたものである。

1 平城京における調査の歩み

平城京は、幕末の北浦定政の研究以来、南北約5km、東西約6kmの範囲がほぼ確定し、近畿の他の都城遺跡にくらべて極めて良好な状況で保存されてきた。1960年代から本格化する、高度経済成長の波は奈良市域にも浸透し、様々な国土再開発事業が推進された。

1960年代
～
1970年代

奈良盆地の西方丘陵地帯における学園前住宅地の開発にはじまり、その後に本格化する奈良山における平城ニュータウンの大規模開発は、市街化地域を拡大するとともに市域の人口を急速に増加させた。1970年代には平城ニュータウンの開発に伴い奈良山丘陵に散在する古墳や瓦窯跡を調査した。その後に進行する、生駒山を越え大阪方面から至る阪奈道路と結ぶ大宮通りや、奈良盆地を南北に貫通し京都から和歌山に至る国道24号線バイパスの開設は、旧来の奈良町を拡大し、盆地の中央部に都市機能の中心を移すことになった。

奈良警察署・日本電信電話公社・奈良市役所が相前後して、旧奈良町から大宮通り添いに移転し、郡山市に近いバイパス添いには倉庫や工場など物流関係の施設が相次いで建設されていた。大宮通りは平城京の二条大路と三条大路との間の条間路、国道24号線バイパスは左京の一坊大路に相当している。つまり、現代になって奈良市街の中心が710年に設定された平城京の中核地域に回帰してきたのである。このような市街地の拡大もしくは再開発に伴い、地下に眠る平城京の遺跡を明らかにする発掘調査が急務となり、平城宮跡発掘調査部では1969年から国道24号線バイパス（ウワナベ古墳外堤・左京三坊大路）、奈良市庁舎（一町占地の貴族邸宅）、奈良県姫寺団地（東市に接する庶民の住宅地）、奈良郵便局（奈良時代の園池）、近鉄奈良ファミリー（西隆寺跡）などで大規模な発掘調査を行ってきた。その最終段階において、「奈良そごう」

店舗の建設が奈良市役所の西方地域において行われることになったのである。

1986年から足掛け4カ年、調査部は「奈良そごう」の発掘調査に専念したのであるが、その後1989年から1991年には、西隆寺跡に所在する「奈良ファミリー」の建て替え工事や「奈良市都市計画道路」の建設に関わり、先の調査と併せてこの付近の条坊遺構や西隆寺跡の遺構をより具体的に把握することができた。一方、奈良市教育委員会が担当している近鉄西大寺南口周辺の再開発に伴う調査、JR奈良駅付近における旧国鉄用地の再開発に伴う調査などによって、平城京の骨格が次第に精緻に判明するようになった。しかしながら、条坊内に展開する貴族の邸宅や、庶民の住宅における建物配置については、きわめて個性が強く一定の建設ルールなどを摘出するにいたっていない。

発掘調査で明らかになった長屋王邸の状況については、発掘調査の過程で隨時実施した現地説明会で報告し、1989年に行った『平城京展』(朝日新聞社)では発掘成果を速報し、1991年の『長屋王「光と影」展』(日本経済新聞社、そごう)では長屋王邸を中心とする展示を行った。しかし、それらの内容については遺跡や遺物の検討が不十分な段階であったため、後に修正を余儀なくされた部分も少なくない。

かつてない広大な面積について行った長屋王邸の発掘調査は、発掘調査の方法や遺物整理の方法などについて、多くの問題を提起することになった。平城京の調査は、1960年代以降断続的に行ってきていたが、水田の地割りに基づく地区割りを採用していたために、調査区相互の位置関係を把握するのに多大の労力を要した。また、行政的には既調査地と未調査地を明確に識別する必要が生じてきた。このような目的に対応するため、1989年度からは測量の基準を国土座標第IV系とし、条坊制の一坊分(531m)を大地区とし、その下に中地区・小地区を設定し、その実施を奈良県・奈良市にも依頼して、平城京の復原を完璧なものにすることを提唱した。近年では空中写真測量図もそれに準じる方法を採りつつある。

5年間の整理期間中、膨大な出土木簡の整理と保存処理については、1989年度から特別研究「長屋王木簡の整理と調査研究」(89・90年度)、「長屋王木簡の整理・科学処理と調査研究」(91年度以降)が文化庁予算として認められ、現在も継続中であり、その間における予算総額は197,000千円である。一方、画像処理によって木簡のデータベースを構築するため、文部省科学研究費補助金が1990年度から認められ、「長屋王家木簡データベース」(90~93年度)、「二条大路木簡データベース」(94年度)として、総額22,000千円が支給されている。

1991年には『平城京 長屋王邸宅と木簡』(吉川弘文館)として、遺跡遺物の概要と、特に解説済みの木簡を公表した。また、時々における木簡解説の成果についても、各年度ごとに『平城宮跡発掘調査概報』や『平城宮発掘調査出土木簡概報』に発表してきた。その間、特に古代史研究者の間から多くの研究論文が提出され、この遺跡の重要性が改めて認識されるようになった。

本報告書では、遺跡・遺物にたいする研究の現時点における総括を行い、各種概報の出版後に提起された種々の論考を参考にし、遺構・遺物を改めて再点検し、より完璧な報告書の完成を心がけてきた。しかしながら、膨大な木簡についての正式報告書は、本書と同時に出版する『平城京木簡一』が「長屋王家木簡」の一部を報告するにとどまっており、「二条大路木簡」が完了するまでには、今後さらに多くの年数を要することになるであろう。

2 報告書の作成

今回の報告は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が1986年度から1989年度に平城京左京三条二坊一・二・七・八坪と同二条二坊五坪において、(株)奈良そごうのデパート建設に伴って実施した第178次、第184次、第190次、第193次、第195次、第197次、第198次、第200次、第204次調査の報告である。当該地域においては1965年度および1977年度から1981年度、さらには1989・1991年度に平城宮跡発掘調査部が第32次、第103-1次、第112-3次、第118-15次、第118-23次、第123-26次、第141-35次、第202-9次、第202-13次調査、奈良市教育委員会が1988年度に第156次調査を実施しており、それらの成果（第32次は概要の一部）もあわせて収録した。以下に(株)奈良そごうデパートに関わる発掘調査の責任者（所長・部長）と担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する。

次数	年 度	所 長	部 長	発 掘 調 査 担 当 者	調 査 組 織
第178次	1986・1987	鈴木嘉吉	町田 章	井上和人 岩永省三 小林謙一	
第184次	1987	鈴木嘉吉	町田 章	小林謙一 玉田芳英 花谷浩 井上和人	
第186次	1987・1988	鈴木嘉吉	町田 章	花谷浩 井上和人 玉田芳英 千田剛道 小池伸彦	
第190次	1988	鈴木嘉吉	町田 章	井上和人	
第193次	1988・1989	鈴木嘉吉	町田 章	花谷浩 千田剛道 寺崎保広 小池伸彦	
第195次	1988	鈴木嘉吉	町田 章	井上和人 金子裕之	
第197次	1988	鈴木嘉吉	町田 章	佐川正敏	
第198次	1988・1989	鈴木嘉吉	町田 章	寺崎保広 小池伸彦 田辺征夫	
第200次	1988・1989	鈴木嘉吉	町田 章	寺崎保広 小池伸彦 毛利光俊彦	
第204次	1989	鈴木嘉吉	町田 章	高瀬要一	

上野邦一、綾村宏、松本修自、巽淳一郎、本中真、松村恵司、橋本義則、小野健吉、村上隆、浅川滋男、島田敏男、森本晋、小沢毅、森公章、渡辺晃宏、(福井県上中町教育委員会—永江寿夫 三重県教育委員会—丹羽徹、東浩成、堀田隆長、平子弘、江尻健、福田哲也、山岡裕 佐賀県教育委員会—五島昌也 ハーバード大学—佐々木憲一 慶應義塾大学—杉山忍、佐野隆 奈良大学—田村充、田村昌弘、半沢幹雄、西川寿勝、赤岩操、大成可乃、藤田由里、岩橋隆浩、池田裕英、佐伯博光、服部直美、石川恵美、鈴木理紗、川島伸子、鬼村雅子、堀沢祐一、宮崎正裕 東京大学—森公章、倉本一宏、鐘江宏之、大隅清陽、佐伯昌紀 横浜国立大学—武内正和 青山学院大学—進藤泰浩、富永樹之 国学院大学—齊藤真知、平石充、高田義人)

報告書の作成は1989年から5ヵ年計画で開始した。遺構関係の整理は遺構調査室と計測修景 調査室があたった。遺物の整理は、木製品・金属製品・石製品類を考古第一調査室、土器類を考古第二調査室、瓦埠類を考古第三調査室が分担し、木簡と墨書き器については史料調査室が担当し、歴史研究室が協力した。

本書の刊行に先立っては、1986年度から1989年度に調査成果を『平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(以下、『平城宮概報』と略す)に逐次掲載し、1989年1月から1990年1月までの間に計4回の調査部全体の討議(長屋王邸検討会)を経て、1991年3月に概報『平城京 長屋王邸宅と木簡』(吉川弘文館。以下、『長屋王概報』と略す)を刊行している。また、多量に出土した木簡

については、別途1988年度から1994年度に『平城宮発掘調査出土木簡概報』(以下、『平城宮木簡概報』と略す)を刊行し、研究所外部の有識者を交えて1989年以降「長屋王家木簡釈読研究会」(翌年から「長屋王家木簡検討会」)を開き、釈読と内容の研究にあたっている。

本報告は、以上の成果を踏まえ、調査部内の各執筆者が改めて遺構や遺物を整理検討したのち、1993年6月から計9回開いた執筆者を中心とする検討会の討議を経て作成した。調査時点や各概報とは解釈が異なる点があるが、本報告をもって正式の見解とされたい。

なお、本報告では土器の一部、東二坊々間路西・東側溝や一部の土坑出土資料、古墳時代の土器や埴輪を割愛し、機会を改めて報告することとした。木簡については、既刊の『平城宮木簡概報』に依拠し、釈文全体は収録しなかった。木簡の正式報告は、本書と併行して刊行した『平城宮木簡一』を最初として、順次公刊の計画である。本書の執筆担当者は次のとおりである。

執筆・協力 第I章 1町田 章 2毛利光俊彦

第II章 1, 2B, 3, 4毛利光 2A高瀬要一

第III章 1A毛利光 1B, 2高瀬 3・4山岸常人

第IV章 1A・B寺崎保広 1C渡辺晃宏 2岸本直文 3A・B・F・G玉田芳英 3C・H・I巽 淳一郎 3D・E杉山 洋 4A・B・F・G, 5, 6A・B小池伸彦 4C~E, 7臼杵 黙 6C加藤真二

第V章 1A森 公章 1B渡辺 2岸本 3A・B玉田 3C巽 4高瀬 5山岸 6小池 7毛利光

補論 1高瀬 2浅川滋男 3南木睦彦(流通科学大学) 4金原正明(天理大学附属天理参考館)、金原正子(環境文化研究所) 5光谷拓実 6松井 章 7宮武頼夫(大阪市立自然史博物館)、8松井、金原正明、金原正子 9村上 隆

英文要旨 Edwards Walter(天理大学)

樹種鑑定は光谷拓実、ガラス・鉱物・石材の鑑定は肥塙隆保があたった。その成果は補論に収録した各氏の分析・鑑定成果とあわせて第III・IV章に引用した。英文要旨の作成には天理大学教授山本忠尚氏の協力を得た。また、金属製品・鉱滓・錢貨の分析には松井敏也、大久保治の協力を得た。別表1・2は館野和己が作成した。

写真撮影と印刷用複製は、佃幹雄と牛嶋茂が担当し、杉本和樹、楠本真紀子、森本佐由理が協力した。ただし、補論に使用した写真的大半は、各執筆者が撮影した。

図面・挿図・表等は各執筆者が作成し、以下の各氏の協力を得た。

赤岩 操、東 仁美、池田あゆ子、石川恵美、石塚美恵子、岩田敦子、今津朱美、上田素土子、内田治子、大日節子、大野佳子、大山綾子、岡 資子、小倉依子、小野 薫、笠原由紀子、勝山文代、鎌田礼子、北野陽子、鬼村雅子、小林慧子、鷺森浩幸、笹 恵子、佐藤直子、佐藤信子、信夫利子、杉本陽子、鈴木景二、高橋留美、高見ます子、谷川亜紀子、出口直美、長尾明美、中西京子、丹羽淳美、長谷川陽美、服部直美、藤田由里、松崎友里江、松岡 縁、南本 忍、丸山美和、森下しのぶ、八十登美子、山下多津子、山田順子、吉川敏子、吉田佐恵子、吉田 学、吉村順子

1990年度に製作した長屋王邸の復原模型(Ph. 281, Fig. 116)は、所長鈴木嘉吉、部長町田章を責任者として、上野邦一、松本修自、浅川滋男、島田敏男が分担して進めた。

本書の編集は、平城宮発掘調査部長町田章の指導のもとに、毛利光俊彦が行った。